

---

君へ

世一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君へ

### 【Zコード】

N1710C

### 【作者名】

一世

### 【あらすじ】

聖菜がいなくなつて3週間後、初めて聖菜の死を知らされた明彦。  
聖菜のことを忘れるため、引越しを決意し、準備に取り掛かつたつ  
とき、聖菜が明彦宛に書いた手紙を発見、そして、それを呼んだ明  
彦は…

## プロローグ

俺は荷物をまとめた…

全てはあいつを忘れるために…

あのころの俺らはまだ14歳で  
それでも本当の恋をした。

年なんて問題でもなんでもないんだ。

俺たちは幸せだった…

でも

若すぎたんだ…

互いにいる時間と、互いが離れている時間のギャップに苦しんだ末、  
高3の春俺らは分かれることにした。

嫌いになつたからとか、冷めたからといつ問題じゃなく、  
純粹に「無理だ」と感じたんだ。

でも、心はその恋から離れられなかつた…。

12年の円日がたち、

俺はあいつに再び恋をした…。

## 第一話 死

「こないだは、残念だつたな…。」  
ほのかに寒くなり始めた秋、喫茶店の茶を飲みながら、何を話すわけでもなくただなんとなくそこにいた和也かずやが沈黙の間を埋めるかのように静かに言つた。

「え？」

「聖菜のことだよ。」

聖菜とは、俺が高三の春に別れたいわゆるモトカノのことだ。  
なんで、彼女の名前が出てきたのだろう…しかも残念??  
「なんで聖菜の話が出てくるの?」

「は?」

俺が放つた言葉は、見事に和也の勘に触つたらしい。  
いきなり席を立つた和也は、俺の胸ぐらをつかんで、無理やり俺を立たせた。

「テメー元カノがあんなめにあつたのになんだよその言い草…!  
お前人間以下だよ!!」

「はあ? なんで怒つてんだよ!?

「聖菜に何があつたんだよ!? 意味わかんねえ!…」

いきなり変なこと言つて頭にこないばっかり無く、俺は当然のように声を張り上げた。

俺らの張り上げた声で、店内がシンとなつていて、にぎがつくと、俺らは逃げるようになにかを終わらせ、場所を変えた。

俺たちは俺たちの近くの公園に場所を移した。今日は休日だから、子供連れの大人とかが多いと思つたけど、そんなことはなく、いたつて静かで平日の朝とほとんどと言つて良いほど変わりがなかつた。俺らはベンチに座りしばらく黙つていた。

「何だよ…・・さつきの。」

話始めたのは俺だった。

沈黙の居心地が悪かつたという理由も一理あるが、それ以上に元力ノ、聖菜の身に何が起こったのかが心配だった。

「なにがだよ」

知つてゐるくせに… そう和也をじれつたく思いながらも俺はなるべく言葉ひとつひとつを丁寧に選んで言った。

「聖菜のことだよ。おれ、聖菜と別れて12年一回もありつの話題聞いたことがねえし… いきなり残念だったとか言われても意味がよく理解できねえ…」

そのとき、公園に来て初めて和也が俺の方を向いた。

「本当に一回もか？」

大きく見開いた二つの目がこっちを見ていた。

どうやら、俺は聖菜のことで一回はきいとかないといけない情報があるよううだ。

「ああ… 一度も聞いてない。

和也、頼む。教えてくれ、聖菜がどうしたんだ？」

和也が小さく「まじかよ」とつぶやく声が聞こえた。

そのあと、深呼吸をすると、急に俺の両肩を痛いくらいにつかんできた。

「よく聞けよ。んでもって、冷静に聞け。

分かつたか??」

なんだかよく分からなかつたから、俺は曖昧に返事をしといた。

「ああ。」

すると、和也は目を瞑り、またさつきよりも深く深呼吸をした。

「聖菜… ちょうど3週間前、車にはねられて死んだんだ。」

「え?」

死んだ…

死んだんだ…  
死んだ… ?

少ししてから、ようやく言葉の意味を理解した。

でもなんとなく、和也が嘘をついてるような気がして聞き返した。

「何だそれ？今なんて？？」

和也はその場にしゃがみこんだ。

和也の声はもう、俺が30年間聞いていた聞きなれた声じゃなかつた。

くしゃくしゃのしわしわになつた声で和也は精一杯俺に話を聞かせてくれた。

「だから…3週間前に…はねられたんだよあいつ。

ひき逃げされてよ…ひいた奴まだ捕まつてねえんだよ…

悔しいよなあ？？おい…

葬式ん時な、俺、あいつの顔みたんだ。

真っ白通り越してもう真っ青であ…よおくできた、蠅人形みたいだつたんだ。

だけど、その蠅人形のために、何人も的人が泣いてんだよ。大の人が声だしてよ…泣いてんだよ。

恥ずかしいくらいないた後で、みんな聖菜の母さんに言つてくれんだ

…『「」愁傷様でした』つて…。

あいつは、もう死んだんだ。生きてないんだよ。帰つてこねえんだよ。

あいつの笑顔も、泣き顔ももう声すら聞こえねえんだよ。」

すじぐぐしゃぐしゃの声で、といりどいろアイダあけて…それでもまだ懸命に話そうとする和也が見てられなくなつて、俺は無理やり笑顔を作つて和也に言つた。

「もう、いいよ

これ以上長い言葉喋ると俺の声も和也みたいにぐしゃぐしゃになりそうで、俺はそれ以上言わなかつた。

聖菜は死んだ。

俺はそれを3週間後知つた。

あいつの前に、線香一本立てられず、あいつがこの世から消えて3

週間ずっと何も知らずに笑って生きてきた。

もう、余つとも無いと思つてた相手でも、いなくなると悲しいんだ…と思つた。

その日は、涙が止まらなかつた。

死んだあいつとの思い出がたくさん詰まつた俺の部屋で、俺は一晩中泣いた。

次の日、俺は聖菜の母親の家に、線香を上げさせてもう一回行った。久しぶりの聖菜の家、喪服むろくに身を包んだ姿で、インター ホンを押した。

ピンポーン…

久しぶりの音の後に、聞き覚えのある声がした。

「はい、桜井です。」

「あ、大野と言います。大野明彦おおのあきひこ。以前、聖菜さんとお付き合いりあうことさせていただいていたものですが…」

「あきひこ？」

悲しみを含んだ声が、一変して怒りと憎悪の声に変わつた。

「はい、大野明彦です。」

「…下さい」

最初の部分が聞こえず、俺は聞き返した。すると、信じられない言葉が耳に聞こえてきた。

「お引取り下さい」

意味が分からなかつた。

なぜ、引き取らないといけないのか、なぜ、そんなことを言われないといけないのか、全然理解ができなかつた。

「あの…」

理由を聞こうとした瞬間ブツツと切れる音とともに、家の中の音がインターネットホンから聞こえなくなつた。

しばらく俺はその場にボーッとたつていた。

しかし、われに返るともう一度インターへんを押してみた。でも、もう一度と聖菜のお袋はインターへんを通して俺に声を聞かせてくれなかつた。

数分後、俺は仕方なくその場を去つていつた。

喪服のまま、何をするわけでもなく、ただ、ただボーッと町を歩いていた。

「あのお…

聞き覚えのある声だつた。しかし、振り向く気にはなれずすつと俺は歩いていた。すると、ここにいるはずのない顔が俺の前に立ちはだかつた。

俺は無意識に

「聖菜」

と言つっていた。聖菜なはずがないのに…

「そつくりに…なりましたよね、私。」

「ああ、要ちゃんか…ごめん…」

要ちゃん、聖菜の唯一の妹で、唯一の姉妹だつた。

要ちゃんは、下を向いている俺を見て、笑顔で言つた。

「良いんですよ…！…そんなこと…！」

「…」

「何ですか？」

「俺は、今まで何も知らなかつたんだ。

違う…今も何も分かつてないんだ。」

涙が出てきそうで、俺は目を大きく見開いて空を見た。

「あいつの彼氏だったのに、何一つあいつの周りのことを俺は分かつちゃいない…」

そんな俺を見て、要ちゃんは気持ちよく笑つた。

「変わってないですねぇ…！」

す』ぐマイナス思考！－本当に30代の未婚の人間ですか！－？人間負け犬になると逆に立ち直るつて聞いたのに－」

そつくりだつた。何もかも、聖菜の笑顔に、声に、考え方。全てが聖菜のようだつた。

「明彦さん、とにかくで、何を知らないんですね？？」

「へ？」

「だから、お姉ちゃんについて、わざわざ言つたじゃないですか。何一つ周りのこと分かつてなかつたつて。」

「ああ…」

俺は、全部を話した。軽蔑されることを覚悟で。

今は要ちゃんとは、仲良く話している気分になれなかつた。いつそう、嫌われたほうが良いと思つたくらいだつた。けど、そうはいかなかつた。全部聞き終わつたあと、要ちゃんは少し悲しみを含んだ笑顔で、話し始めた。

「お姉ちゃん、明彦さんと別れた後すぐ落ち込んで、それでお母さんは、きっと明彦さん嫌いになつちゃつたんですよ。でも明彦さん！自信を持つてください！－明彦さんはお姉ちゃんが好きになつた、最初で最後の人間なんですから！－！」

「最後…？？」

「そうですよ！－お姉ちゃん、何を決意したのか、私に『私は明彦を最後の彼氏にするから！－』つて、私の前で、宣言したんですよ！－」

要ちゃんは手を上げて聖菜のまねをして俺の前で宣言してくれた。

「あッ」

要ちゃんが思い出したよひに叫んだ。

「どうしたの？」「..」

「明彦さん…－やつと笑つてくれましたね！－」

そつと言えば、要ちゃんを見ていたら、口元が自然とゆるくなつていた。

「明彦さんは、とてもとても素敵な男性です。ちゃんと自信を持つ

てください！！」

そういうつて、おもいつきり背中を叩いてくれた。

最初で…最後の彼氏…かあ。

## 第一話 夏

くそ暑くて、蝉がうるさいくらいで、夏真っ只中。

俺と聖菜は図書館で勉強をしていた。

聖菜と俺は、そんなに親しい仲では無かったのだが、夏休みに入つて、よく図書館で会うのをきっかけに良く話すようになった。

「意外だね、本…好きなの？？」

それが聖菜が始めて俺に話しかけた時に言つた言葉だった。

「いや…別に。お袋が、勉強しに行けつてうるさいから。」

「そりなんだあー。じゃあ一緒に勉強しない？」

「え？」

「大野君いつも数学のテストで一位でしょ？？数学教えて…！」

そのかわり、私にできることなら何でもするから…！」

そんな、こんなで、俺たち一人は夏休み中ずっと一緒に勉強していた。

聖菜はいつもテストの総合点は学年トップで、そんな彼女に俺が唯一勝てる教科が数学だった。

聖菜はいつも明るくて、スポーツもできる。クラスのみんなからは憧れの的だった。

そんな彼女に、俺は数学を教えている…。

数学万歳！！！

「今日ひてさあ、夏祭りだよね」

いつものように向かい合つて勉強していると、聖菜がつぶやいた。

「ああ…そういえば…」

夏祭り…なんて久々の響きなんだろう…

まい年の夏は部活か勉強で、俺はこの夏祭りなんて5年ぐらいたことがない。というか、行こうと思つたことが無い…が適切か

な？？

「誰かに誘われてる？？」

そんなわけない、5年間ずっと断りっぱなしでもうみんな声をかけてすらくれない。

「いや、誰にも誘われてねえ。」

「じゃあさあ・・・」

一緒に行かない？

そう俺には聞こえた。

「へ？」

次は聖菜の顔をみて聞き誤らないよう耳をすました。

「夏祭り、一緒に行かない？？」

「俺と...誰？？」

「私と大野君でー！」

あ…友達も誘つていいけど…」

すごく顔が赤い…俺はそんな聖菜をかわいいと思つた。

「いいけど…」

へ？という顔であいつが俺を見た。

こんどは自分の顔が赤くなるのを感じた。

「二人で行かない？？」

「え…あ、本当？？用事とか…無いの？？」

「ねえよ。それに断るわけ無いじゃん。桜井の説いて。

おれ、桜井が好きなんだよ。」

おれはこの日、この場面、この流れに全てをかけた。

シンとした空気が流れるごとに、俺は何事も無かつたかのように勉強を再開した。

本当は頭の中真っ白で、心臓バクバクで、なに書いてんのか自分でも分かつてなかつた。

「す…好きつて…どっちの？？」

数分後、突然投げかけられた質問、俺はこのとき、自分がなんであるなこと言つたのか今でも後悔している。

「英語で言つと～ I love you の方」

またシンとした空氣が流れ、それから聖菜の笑い声が聞こえた。

「なんだよおつっつ」

「何今の一…うちこんな告白初めてえ…！」

「つるせえ…！俺も今言い終わつた後歯が浮いたんだから…！」

「でしょお…！…でもね…今すごくうち嬉しい。」

そういうて聖菜は優しく微笑んでくれた。

「へ？」

「大野君がうちの事そんな風に思つてくれてす”くす”く嬉しい

！…」

「それつて…まあ…」

「ん…？」

俺は今度はドジを踏まないよつに言葉を選んだ。

「桜井の返事に少しば期待していひつてこと？？」

桜井の顔から笑顔が消える。

ああ…俺の青春終わつた…

そう、思つた。

その気にさせるよつなこと言つなよなつて、聖菜をすこし恨んだ。  
だけど、次の瞬間俺の感情なんて一気に吹つ飛んだ。

「私も好きだよ。」

好きだよ…好きという発音がこんなに良いなんて、今まで思いもし  
なかつた。

思わず俺は、ここが図書館といつのを忘れて聖菜に抱きついていた。  
聖菜は少し顔を赤らめて笑つていた。

これが俺らの夏と恋の始まりだった。

その日の夕方、俺たちは一人で夏祭りに行つた。

長くて茶色い髪をひとつに束ね、ピンクの浴衣に身をまとつた聖菜  
はいつも以上にきれいで清楚な感じがした。髪の毛が荒れててパツ  
としない俺のそばにいるのはなんだかもつたない気がした。

「行こうー！」

そう言われて初めてつないだ手は、今思い出してでもキドキするほど嬉しかった。

そして、付き合い始めて最初の夏は、中間テストの総合点1位桜井聖菜、2位大野明彦という張り出し表の展示とともに過ぎていった。

## 第三話 守

聖菜が始めて俺の家に来たのは、3回目のトークのときだつた。聖菜はいつも突然何かを思い出したように提案する。このときも、俺と聖菜は買い物に行こうといつていた。でも、聖菜が突然立ち止まり、俺のほうを向いて言つた。

「アキのお母さんに会いたい……」

「ええ……」

そうして、有無を言わせらず聖菜は俺を引っ張つて家の前まできたんだ。

俺の家は図書館のすぐ隣のマンションだつたし、夏祭りの夜もそこでずっと話していたから、聖菜は俺の家を知らないはずが無かつた。家の前まで来た聖菜は俺のほうを向いて

「家、何号室？？」

と聞いた。

「本当に俺んちに来るの……？」

「当たり前でしょお！これまで来たんだからあ～～～！」

家にアキのお母さんいるんでしょ？？

「まあ……いないといつたらうわになるけど……」

「アキお母さんに付き合つてること決つてないの？？」

そんなの言つてないに決まってる。

こんな思春期真っ盛りな男の子が自分が付き合つてゐる人のことなんか親にいえるはずが無い。

「家でそつこつ系の話でないし……」

「へえ……」

そういうつて、やつやのテンションがぐくやく、聖菜は顔をつむかせた。

聖菜、「めんど。やつやおつとしたとき、聖菜の後ろに母が立つていた。

「お袋！？」

俺は驚きのあまり、半分叫んでいた。

お袋という単語に反応して聖菜がすかさず

「へー？ アキのーー？」

といつた。

お袋はそんなおかまいなしに俺のところにずんずんと近づいてきて

「これアキー！ 女の子泣かしちゃいかんだろおがーー！」

と言つて、俺の頭に拳を思にシケしげしげつけた。

「こいつてえーー！」

そういうつてもがく俺を無視し、今度は聖菜のほうを向いた。

「「めんなあ。うちのアキが…」

「いや… 何もされませんから大丈夫ですーーあのあ…」

俺は聖菜が言おうとしている言葉を察知し、すばやく

「お袋！ 俺、聖菜と付き合つてる。」「

と言つた。

きっと、俺が言わなきや、今度こそ男失格になつてたと思つ。自分の母親に自分が付き合つてることを言えない男なんて、とんだチキンだと俺は感じたから…。

聖菜は真つ赤になつた顔で俺を見てそして幸せそうな笑顔を作つた。

「アキがー？ 付き合つてるのかいーー？」

「まあねーー！ 聖菜。桜井聖菜つて言うんだー！」

そう言つて、聖菜の肩を引き寄せた。

お袋はその姿を、目を大きくして口をあんぐり開けて見ていた。

「ああんたあーーーこいつからよおーー？」

「夏祭りン時からーー！」

「夏祭りーー！ そおかいあん時からかあ…」

「あのおーー アキのお母さん。」「

聖菜はお袋に近づき、まっすぐにお袋の目を見た。

「私、明彦君の最後の彼女になつていですか？？？」

急に言つたその言葉。たつた、一言のこの言葉に俺は最高の幸せを

感じた。

お袋はまたもやビッククリした顔で聖菜と俺を交互に見た。

そして、やせしく微笑んで言った。

「こんな真っ直ぐな子にアキは愛されてんだね。立ち話は何だから、家に入らない？？」

そういうつてお袋は聖菜を家に招待した。家に入つて、お袋はすぐにお茶とお菓子、そしてアルバムを出してきた。

「アキのお嫁さんになる人に、アキのちっちゃい頃のこと教えてあげようと思つてた。」

そういうつて、食卓台に3冊のアルバムを乗つけて、一番大きいアルバムを開いてみした。

かわいい！！と聖菜が言い、ゲッと俺が言った。

「こんなもん見せんなよ！！」

そつと置いて、俺はアルバム3冊をお袋からひつたくつた。

「アキ～！！みしてよお～～！」

「だめ～～！」

そつと置いて、自分の部屋の本棚にアルバム3冊をしまつた。

その日の夜、俺んちは聖菜の話で盛り上がつた。

そして、みんなが寝静まつた後、机に向かつて勉強してゐる俺にお袋が

「あの子を一生大切にするんだよ。

人に愛されることは、すごく嬉しいことだけど、人を愛すのはもつと嬉しくて、大変なことなんだ。

あんたはあの子にたくさん愛をあげなさい、そしてたくさん愛をもらはなさい。」

そう言われたのを今でも鮮明に覚えている。

そのときは、すごく恥ずかしくて聞き流しているふりをしてたけど、今思つと、俺は良いお袋を持ったんだなつて感謝してゐる。

聖菜が見損なった俺のアルバムを見たのは、高2の秋だった。

聖菜はあんなに長くてきれいだった髪の毛をぱっさり切って、すこし、すつきりした面持ちで俺んちにきた。

俺の部屋に入つて、いつものように部屋内のものをあさつてみると急に悲鳴をあげた。

「あー……これツ……」

「何……どうした？？」

そう言つて見てみると聖菜が3冊の本を大事そつに抱えていた。

「アルバム……」

「ああ……そういうやあ初めて聖菜がうちに来たとき俺がここに隠したんだよなあ……」

「見ても……いいかなあ」

そう言つて俺を見る。俺は聖菜のこの頬み方に弱くて、いつも「ダメ」といえない。

このときもそうだった。

「いいよ。別に」

そういうつて、一人でアルバムを見ることにした。

「かわいい！！」

聖菜は赤ん坊のときの俺を知らない。俺もまた、聖菜の赤ん坊のときを知らない。聖菜は俺の過去を写真ひとつひとつを見て知りうとしている……。

なんだかそれがすぐ、くすぐったかった。

「聖菜。」

「ン？」

「今度、聖菜のアルバムも今度見せろよな。」

「……」「めん、ない。」

「へ？」

「うちんちね、うちが小6のとき家事で全焼しちゃつたの。だから残つてるのは小学校の卒業アルバムとか……だけだと思つ。」

「全焼……」

「あッ、『めん! めちゃんこ』暗い話になっちゃったね……でも大丈

夫だよ! お金も全部お母さんが守つてくれたから!

それに家族誰一人怪我が無かつたし!…」

「聖菜…」

おれはそつ言つて聖菜を抱きしめた。

「あき…?」

聖菜は強い。何をやられても、どんなことがあつても弱音ははかなかつた。

でも、なんだかそれが俺にとつては悔しいことでもあつた。

「俺の前でくらいい、弱音はいてくれよ。」

まだまだ、俺は聖菜を守つてないとこのとき感じた。

聖菜が俺を頼つてくれるまでは、本当に『守つている』ことにはならないと、そう感じたんだ。

「ありがとウ」

聖菜がそつ、俺の胸の中で囁いた。

この日からちよづじ一年後、俺らは別れた。

俺が聖菜を「時間」という敵から守つてやれなかつたから、俺らは引き離されたんだ。

もつと、聖菜を愛をあげていれば良かつた。もつと、愛していろと言えば良かつた。

そつ俺は、一年後に思つことになるのだ。

## 第四話 離

聖菜が髪を切ったあの日から、あいつは俺たちに来なくなつた。バイトが忙しくなつたとかどうとか。

聖菜のいない空間は俺に憂鬱と不安を与えるようになつた。電話やメールをしてもすぐに帰つてくるが、「忙しいから後でね」で、すぐに切られてしまう。

そんな日々が続いたある日、俺が和也とゲーセンで遊んでいると、見覚えのある制服と顔の子を見た。

「聖菜だッ」

俺は思わず叫んだ。けど、聖菜には聞こえてなかつたみたいだつた。和也はため息をつくと、俺の肩に手を置いて言つた。

「ばあか幻覚だよ。聖菜ちゃんバイトで忙しいつて言つてたんだろ？」

「でも、あれ…聖菜だよ。」

和也が聖菜の方を見たとき、肩に置いていた手の力が抜けるのを確かに感じた。

「まじだ…なにやつてんだ?」「んなとこで…。」

そんなの俺も知らない。だから俺は和也のほうを向いて言つた。「後をつけよう。」

聖菜は数人の女の子の後ろを歩いていた。

制服が一緒だから多分同じ高校なのだろう。

そして、聖菜たちがついたところは、俺の通う高校の裏だった。

「何してんだ? あいつら…」

と和也が言つたが、俺はそれを無視した。嫌な予感がする…

そう思ったとき、俺の勘は見事に的中した。

ドンという鈍い音とともに聖菜は壁に叩きつけられた。

「かわいいからって調子のりすぎー。」

髪の長く、色の黒いオンナがそう言つて聖菜の髪の毛を引っ張つて立たせた。

「自分さあ…男子全員に好かれてるとか思つてるの?超ナルシスト!!」

そういうて聖菜に手を上げた。

俺はそれが許せなくて、気づいたら取り巻きの女子も合わせて計九人を殴つていた。

そして、聖菜がしゃがんで泣いていた。

「アキ…あたし…」

そう言つて顔を覆つている聖菜の手には、無数の切り傷があつた。

「自分でやつたの?これ。」

和也が聖菜の手を引つ張り、聞いた。

すると、聖菜は首を立てに振つた。

「あたし、アキがきれいだねつて言つてくれた髪の毛切られて…次の日には殺されると思ったの…でも、あたしあんな奴らに殺されるなら、自殺したほうがマシだと思って…それで…」

俺は、4年間付き合つて初めて聖菜をたたいた。

パシッという音と共に、聖菜の顔は和也のほうに向いた。

「死ぬなよバカ野郎ッ」

聖菜の目から次々に涙が流れる。

俺は聖菜を抱きしめて言つた。

「お前が死んだら困るんだよ。」

お前が死んだら、俺は誰を守つてけばいいんだよ…バカ野郎頼れつて言つただろ?お前が始めて家に来てお袋に挨拶したとき、一生守るつて俺は誓つたんだよッ

死ぬなんて…お願ひだから言わないでくれ。

今も…これからも俺にはお前しかいないんだよ…」

「ごめん」と何回も泣きながら言つ聖菜につられて、俺もいつの間にか泣いていた。

「お前…俺の最後の彼女なんだろ？？」

「うん…」

「ならよお…俺が死ぬまで生きていよ…絶対に死ぬなよ…」

「うん…」

「何があつても俺に言えよ。じゃ無いとまた、今日みたいに勝手についてくからな」

「それストーカーだつて」

そつれまで俺の後ろに立つてた和也が言った。  
俺たちは笑つた。

それから、たくさんの円口が流れ、俺らは高校三年生になった。

「別れよ」そう言い出したのは最後の彼女になると、母の前で宣言した聖菜の方からだった。

信じられなかつた。

いじめの事件以来、俺らは互いに本当に助け合える仲になつたと思っていた。

聖菜も辛いときには俺に言つてくれるよつになり、俺の前で泣いてくれた。

俺も、聖菜のために頑張ってきた。なのに…

「なんで？」

そう聞くと聖菜無理に笑顔を作つて言つた。

「あたしね、アキのおかげであたしは強くなれた。

アキのおかげであたしは今生きてる。

アキのおかげであたしは毎日が楽しい…

まだあたしは、アキを愛してる。

でも、あたしはアキに会つてから、アキに頼りっぱなしになつてたの。

あたしの中心はいつもアキで、あたし、いつの間にかアキの前でしか素直になれてなかつたの。

最初はいいかなあつて思つてたけど、さうとにかくないんだよ。この

ままじゃ…

アキがいなくなつちやつたら、もう生きていけなくなつちやうから。  
だから、あたしアキから離れなきや。

一人で生きてけるようにしなきやつて思ったの。

あたしには、妹もお母さんもお父さんもいて、でも本当の家族の前  
でも素直になれないあたしが、アキの前でしか素直になれないあ  
たしがいたの。

正直だめだと思つた。

お父さん、今癌で入院中なの。お医者様はもう無理だつていつてた  
の。もう、2年も生きられないって。

最後にお父さんの前で元氣で素直なあたし見せてあげないといけな  
いとつて思うの。

だから、あたしはアキとは離れないといけないと思つる。じゃない  
と、アキ以外の人に素直なあたし見せてあげられないから…  
「ごめんね、アキ…愛してるよ。」

目にいっぱい涙浮かべて笑う、俺が初めて見る聖菜がそこによいた。  
もう何を言つても無駄なんだと、俺は思つた。

「それで…いんだな？聖菜は…」

俺の最後の悪あがきだった。けど、聖菜はいつもあのまっすぐな  
目で、俺を見て、

「うん」

と、力強く言つた。

「じゃあ…強くなれよ。」

「うん」

その日、紫色の空の下で、俺らは最初で最後のキスをした。  
数え切れないくらいの愛と思い出の詰まつた、別れの悲しいキスだ  
った。

途中、こりえてた涙が溢れてきて、俺らは泣きながら、唇を離した。

「じゃあ…今までありがとうございました」「うう

そういうのは俺で、手を振つて別れた。

帰りのバスの中で俺は、頭を抱え込むよつこして必死で声を押し殺して泣いた。

きつと、声は漏れてたと思う。

でも、泣きやめなかつた。

本気の恋だつたんだ。

なのに、なんで俺は引き止められなかつたのだらう…

なんで俺は、お前が必要なんだと、声を張り上げて言えなかつたんだろう。

時期にあいつは新しい恋をして、俺のことを忘れていくのだらうか…

俺も、新しい恋をして、あいつを忘れられるのだらうか…

忘れるという言葉は、悲しい言葉だ。

誰かに忘れられるといつことは、その人はもつ、俺と一緒にいた記憶がないといふことで、

俺がその人の記憶からいなくなつているといふことなんだ。

…どうか、聖菜の記憶から、俺を消さないでください。

聖菜と俺がいたという事実を残しておいてください…。

そう俺は泣きながら神様に頼んだ。

## 第五話 越

聖菜が死んでもう4週間がたつた。

俺は、今いる家を出て行き、一人暮らしをすることを決意した。この家には聖菜との思い出が多すぎるからだ。

母さんは俺が一人暮らしすることに反対はしなかつたし、逆に「ようやく一人暮らししてくれんのかあ！！」と喜んでいた。

準備をするときに最初に手にとったのが3冊のアルバムだった。  
懐かしい

そう思つてパラパラと手紙をめくつていると、一枚の紙が落ちた。何だらうと思い、その紙を拾つてめくつてみると、見慣れた懐かしいマル字で、

『生まれて一番最初にとつてもらつた写真を見ろ』  
と書いてあつた。

この文字は聖菜のものに間違いなかつた。

俺は、書かれたとおりに一番最初にとつてもらつた写真を出してみると、また手紙が入つていた。

次は「おふくろの一番大好きな香水の空き箱。」

と書いてあり、物置の、お袋の宝箱の中を見てみた。

するとまた文字が書いてあり、

「あたしがあげたのに一度も使つてくれないコップの中」と書いてある。

急いで台所に走つて行き、聖菜からもらつた、一回も使つたことの無い犬のプリントが施されたコップの入つた箱を開けた。

そして、中にある手紙を呼んだ。

「アキの部屋のカーペットのなか。」

そうかかれていた。

俺は急いで部屋に戻り、カーペットを部屋からはじめた。すると今度は

「あたしとアキが始めて夏祭り行つた時の待ち合わせ場所のプラン  
口の前の二股の木の真下」

と書いてある。

俺の家から公園までは結構近い。

俺は、急いで聖菜と初めて行つた夏祭りの待ち合わせ場所まで行つた。

二股の木の周りを掘り始めた。

すると、ピンクの水玉模様の空き箱が出てきた。  
それを開けると、中には無数の紙が入つていた。  
どれも、日記のページを破つたものようだつた。  
見てみると、聖菜は毎日この手紙を書き続けていたらしい…  
俺と別れてもずっとずーっと…

7月29日

今日、図書館で同じクラスの大野君に会つた。  
勉強をしに来ているみたい。

少し嬉しい気分だつた。

だつて大野君はあたしの憧れの人だもん

8月25日

今日、大野君に告白された！！  
すごくすごく嬉しい

大野君があたしのこと好きだつたなんて…  
これ以上の喜び、今のあたしには無いなあ…

10月30日

今日はアキがアルバムをみしてくれた。

アキかわいがつた！！

そこで、あたしは提案をしたのだ！

アキのアルバムに手紙を入れといったから大丈夫だよね。

もし、アキがこれに気づいたら、ちゃんと返事書いてね！！

1月4日

今日、アキに助けてもらつた

ありがとう

大好きだよ

でもあたし、今日気づいたことがあるの…  
もう、終わりかもね…あたしたち

1月4日

今日アキと別れた

すんなりあきらめてくれてありがとう  
でも…いつかあたしアキにプロポーズしに行くから待つてね…!!

3月19日

アキーまだこれに気づかないの！？  
どんだけですかあ！？

あたし、決めました。

初めてアキのお母さんに言つた言葉、あたし実現してみせるよ

アキはあたしの最初で最後の彼氏だから！！

アキもあたしが最後の彼女でありますように…

6月8日

今日留学が決まりました。

行くのは2週間後の月曜日です。

お願ひ、あたしが日本にいる間にこの手紙に気づいて…

聖菜の涙のシミは、俺と別れてから急激に多くなっていた。

そして、俺はその後にほかの日記とは違う、丁寧にびんせんに入った紙をみつけた。

それを開けてみると、俺宛の手紙だった。

日付は… 聖菜が死んだ日の前日だった。

俺は急いでその手紙を読んだ。

## 第六話 君へ

『あきへ

とつとう『涙づけなかつたね GAME OVERだ  
この手紙を読んでいるころ、あたしはもうあきの近くにはいないだ  
るうね…。

最後にあきの顔見たかつたよ…  
声聞きたかつたよ…

多分あきはあたしと別れてからもうあたしの事なんて考えてなかつ  
ただろおね

あきは結構いさきいいモンね

そういうとこも大好きだつた。ううん大好きだよ…  
実はあたし、あきに嘘言つた。

お父さんは癌なんかじゃなかつた。

お父さんあたしが小3の時、お母さんと別れて、今でも消息不明…  
健康かどうか以前に、どこにいるかどうかすら分からないの。

あたしがあきと別れた理由はね、怖かつたからなの。  
もつと言つと、依存症になつててね、あたし。

あきがいないと死んじゃうかもつてくらいあきのことずっと考えて  
たの。

そんな自分が怖くつて怖くつて…

だから、あたしいじめられてた時、これをきっかけにあきを嫌いになれるかもつて思つてたの。  
でも正反対だつた…

あきが助けに来て、あたしをぶつた時、一生あきから離れられないって、

あきがあたしの前で初めてないた時、

あきを嫌いになるのはも'つ無理だつて思つたの。

でもね、

そつ思え'ば思ひ'ほじ辛かつたの。

あきがいない時間が、辛くつて辛くつてたまんなかつた。

あたし、だからやんな時間から逃げたかつたの。

でも、生きとれば絶対にあきとはなれる時間が腐るほどじでへるでしょ？

だから、あたしはあきから逃げたの。

あたしがもつと強かつたらわる…ずっとあたし幸せでいれたの…あきどすとこにこる時間ほど楽しくて、幸せな時間は無かつたよ。けんかした時も、ずっと好きだつた。

好きすきしてイライラしてたんだよきつと。

でも、幸せな時間に慣れちや'ひ」とほじは最悪なことは無いんだね、イライラしなくなつて、好きだけど、一口一回はかすがこあえなくなつたとき、

すこくすこく辛かつた。

死んじやつかと思つた。

こんなわが今まで身勝手なあたしを許してね。

あたしはあきが今好きな子ができたなら応援したいと思つてゐる…でも、もしまだこんなあたしでも可能性があるのなら、どうかやり直してくれませんか？？

連絡待つてます。』

最後には、聖菜のアドレスと電話番号が書いてあった。

涙が止まらない…

本当に涙が止まらないといつのは、息をえもできないうらう声が出る。

そして、その手紙をもったまま、俺は聖菜の家に足を運んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1710c/>

---

君へ

2010年10月28日04時49分発行